終論

大宰府学研究の成果と展望

往時の大宰府政庁

終論　大宰府学研究の成果と展望

第１章　研究の成果　　小嶋　　篤 …… 357
第２章　研究の展望　　楠井　隆志・小嶋　　篤 …… 367

終論では、第１部～第７部の研究成果を取りまとめ、九州国立博物館が実施してきた大宰府学研究の総括を行う。本総括をふまえ、大宰府学研究の今後の展望を示し、さらなる飛躍のための出発点とする。

太宰府の森に囲まれる九州国立博物館

第１章

研究の成果

小嶋　篤

はじめに

本書では、九州国立博物館と関係機関、地元市民が連携して進めてきた大宰府学研究のうち、講演会・シンポジウム資料、展示図録の論考および新稿を、各執筆者の協力を得て掲載した。再掲載した論考は、掲載時の原稿を活かしているが、加筆・修正等が新たに加わっていることを改めて明記しておく。以下では、各論考の概要を整理しながら、大宰府学研究の成果をまとめる。

１．大宰府の器と編年

第１部では、考古学研究の基盤の一つである土器編年を集中的に検討した。第１章「西海道の土器編年研究」は、長直信が進めてきた土器研究のエッセンスが濃縮された内容となっている。「はじめに」でも丁寧に説明するように、シンポジウム当日も土器編年の手続きをシンポジウム参加者と共有する形で研究発表が進められた。本章は九州北部の土器編年の到達点を要約しており、その成果と課題は多岐に及ぶ。その中でも今後の研究動向を示唆する課題として、「遺跡性格差と土器編年」の問題が印象的である。大宰府管内の体系的時間軸の把握には、「大宰府周辺の編年とは別に周縁地域用の消費地編年構築」が求められる。この遺跡性格差の問題は、図らずも松﨑大嗣による第３章「西海道南部の土器生産」で、より端的な事例が挙げられた。松﨑は成川式土器の学史を追体験する形で議論を進め、薩摩・大隅国の国府周辺とその外縁地域では、土器様式の変化に違いが生じていることを明快に整理した。その背景には、「土器様式転換の背景には、移民政策や律令制によるヒト・モノ・情報の流入量に大きな地域差があった」ことを想定する。弥生時代の伝統が色濃い成川式土器の存在は、考古学研究による大宰府管内の地域実態を探る上で、大きな可能性を秘めた研究素材と言えよう。

上記では遺跡性格、とくに消費地の様相に注目したが、次に土器編年のもう一つの柱である生産地の様相を取り上げる。第２章「西海道北部の土器生産」では、石木秀啓が牛頸窯跡群（牛頸須恵器窯跡）を中心に土器生産体制の時系列変化を検討した。本章では、牛頸窯跡群の様相を「大野城・水城築造以前」、「大野城・水城築造時期」、「大野城・水城築造以後」の三段階で整理し、窯の基数や窯構造・器種などの変化を追った。石木がとくに注目したのは大野城・水城築造時期にあたる牛頸窯跡群編年Ⅴ期の様相で、窯数・生産器種の減少に須恵器工人の軍事動員の可能性を提示した。また、水城築造による地域の軍事的要塞化による土地利用・交通路・景観・住民の心情という多面的な影響も想定する。これらの可能性・多面的影響の是非は、さらなる相互検証が必要とは言え、今後の研究を見据えた仮説と評価できる。

２．大宰府と古代山城の年代論

第２部では、第１部の議論をふまえ、大宰府と古代山城の築造時期に焦点を当てた。第１章「大宰府と古代山城の誕生」では、赤司善彦が時代背景とともに、各遺跡の年代決定の論拠（考古資料・文字史料）を個別に整理し、各資料の歴年代比定を相互検証することで年代論を論じた。とくに注目できる資料は大野城跡太宰府口城門出土木柱である。赤司自身も慎重を期す650年の伐採年は、『日本書紀』の665年

築城記事を検証する素材である。本章では、『続日本紀』記載の怡土城築城期間（13年）を傍証とし、古代山城の築城期間を長く見積もることで、650年と665年の年代差に一定の整合性があることを見出している。第２章「大宰府造営の年代論」でも、杉原敏之が考古学的手法に沿って年代論を積み上げた。杉原の年代論の骨子は、遺跡発掘調査時における層位的検出と記録であり、旧石器研究者としての矜持が表れている。本章では、大宰府政庁からはじまり、政庁周辺官衙、水城、大野城の築造時期が整理されており、各遺跡で７世紀第４四半期から８世紀第１四半期が画期であることが再確認できる。その中で異質なのが、水城東門地区木樋掘方SX051埋土上層出土須恵器群で、他の遺跡出土土器に比べて著しく古相であることが改めて強調された。本土器群は遺跡間での相互検証から水城築造時期と直結できない状況にあるが、第１部で着目された「遺跡性格差」や、水城築造の作業実態（土器の埋没過程）等の複合的研究課題を内包する。本課題の解消には、さらなる論理的手続きの相互検証と発掘調査記録の精度向上が求められる。

水城跡と牛頸窯跡（水城土塁奥の低丘陵地に分布）

水城跡の土塁（博多湾側）

第３章「日韓古代山城の年代論」では、向井一雄が東アジア的視点から日本古代山城の年代論を論じた。本章では、朝鮮半島の古代山城を高句麗・百済・新羅・伽耶諸国に分けて整理するが、単なる地理的区分でなく、出土遺物や城郭構造をふまえた論証を経る点が特筆できる。近年の研究動向がまとめられており、朝鮮半島での調査研究の進展が日本古代山城の把握に繋がることが実感できる。他方では、神籠石や先行説・後出説等の学史的整理がなされ、日本古代山城の年代論の推移が示されており、日韓の研究到達点が俯瞰できる。これらの整理をふまえた上で、向井は日本古代山城の新年代として、年代決定論拠を積み上げた上で、先行説の中でも７世紀前半築造説を明快に否定した。問題となるのは、鬼ノ城（鬼城山城）の評価である。向井は鬼ノ城出土遺物500余点に坏Hが全く見られない点を重視し、白村江敗戦を築造契機に求めることはできないと説く。一方、第５章「瀬戸内海沿岸における古代山城

の築城年代」では、南健太郎が鬼城山城の築城時期を７世紀第３四半期と把握する。南は７世紀第４四半期の土器溜まりが上方からまとめて廃棄された出土状況であることをふまえ、城門出土木材の炭素14年代測定と古い土器型式、屋島城・金田城の城門構造の類似から築城年代を論じた。なお、南も古代山城の存続期間と占地論から、鬼城山城等の山城を天智期の対外･対内に向けた複合機能を想定しており、白村江敗戦のみに築造契機を求めてはいない。両者の結論の違いは、鬼ノ城（鬼城山城）出土土器の評価に起因する。第１部「大宰府の器と編年」の問題提起をふまえると、鬼ノ城（鬼城山城）出土土器の検証には、吉備における「遺跡性格差と土器編年」という課題も横たわる。

鬼ノ城と同じく、城内の発掘調査が進んでいる遺跡は他に鞠智城跡がある。第４章「有明海沿岸における古代山城の年代論」では、矢野裕介が鞠智城を中心に存続年代と機能を整理した。本整理に基づくと、鞠智城Ⅲ期前半（８世紀第１四半期）までは鞠智城と大宰府政庁の変遷の連動が認められる。この連動を重視する矢野は「大宰府防衛の一翼を担う軍事的役割とともに、その維持管理の面でも大宰府が大きく関与していた」と想定する。あわせて、『肥前国風土記』と『延喜式』の記述を基に、７世紀の有明海に古代山城・官道・烽による情報伝達網が存在したと考えた。

３．筑紫の大城

第１部・第２部の年代論をふまえ、第３部では「筑紫の大城」と称される大野城について、考古学・文献史学・土木工学・地域史から多角的に検討する。第１章「古代山城とＧＩＳ」は赤司善彦が進めてきた考古学におけるＧＩＳ活用研究の軌跡がまとめられている。航空レーザー計測による広域の微地形把握は、古代山城研究の研究水準を底上げする成果である。赤司は本地形データを素材として、眺望や可視領域、自然地形と城壁構造等を対象とした今後の研究推進を説く。第２章「大野城の研究成果」では、赤司が大野城の歴史的評価と課題を、城壁・城門・築城年代・役割の変化・立地と分布の項目に分けて整理し、第３章以降の議論の前提を整えている。

重藤輝行は第３章「糟屋屯倉と怡土城からみた大野城」において、考古資料と文献史料を併用しながら大野城築城の経緯を探った。本章では、シンポジウムの趣旨でもある糟屋（宇美町側）と大野城の関係に着目する。重藤は古代山城築城にかかる期間や労働力、資材等を念頭に長期的な視点で大野城にかかわる人々の動きを把握する必要を説く。具体的には、古墳時代中期後半以降の馬韓・百済系土器の分布から、糟屋地域や基肄城周辺に渡来人の居住を想定し、彼らが古代山城築城に参画したと想定する。また、糟屋屯倉が大野城築城期の物資・兵の集積地であった可能性も提示した。第３章と同様に、長期的な視点で大野城と渡来人の関係に着目するのが、第８章「大野城築城と新羅」である。上田龍児は自身が担当した大野城市乙金地区の調査成果を基に、大野城と新羅の関係に焦点を当てた。四王寺山に接する乙金地区では、半径１㎞圏内に約15点の新羅土器出土が見られ、かつ６世紀末前後～７世紀後半まで途切れることなく搬入が認められる。乙金地区の集落動態では７世紀中頃に居住痕跡が希薄となることもふまえ、新羅との関係を有する本地区の集団が、大野城築城に関与したと想定する。本想定は、対岸に位置する牛頸窯跡群の検討結果（第１部第２章「西海道北部の土器生産」）とも通じており、牛頸窯跡群編年Ⅴ期の評価とあわせて、さらなる検証が期待される。糟屋地域と大野城の繋がりについては、第７章「大野城と宇美の歴史的繋がり」で、松尾尚哉が通時的に整理し、大宰府･水城がある御笠郡（太宰府市・大野城市側）からの視点とともに、大野城跡の約８割が属する糟屋郡（宇美町側）からの視点も必要と説く。本章で象徴的なのは、近世･近代における四王寺山･大野城跡に対する地元民の認識で、大野城と四王寺を基点とした歴史的景観（信仰の場、観光事業）の形成が認められる。

第４章「文献史料からみた大野城」では、松川博一が大野城関係の文献史料を、築造・地名・倉庫・兵士の項目に分けて整理する。地名に関する成果では､四王寺山の山名が「大野山」→「大野城山」→「大城山」→「城山」→「四王山」と変遷することを指摘する。また、本章では大野城の守衛について、筑

前国や大宰府の管轄というおおまかな理解ではなく、大宰府管轄時には府下六国からの上番兵士（大宰府常備軍）という具体像を提示する。大野城の城庫は８世紀以降も機能しており、平安時代の太政官符に「大野城器杖」・「大野城衛卒粮米」の収納物関連記事があることは本文のとおりである。これらは平安時代にはじめて収納されたものではなく、奈良時代以前の収納物を踏襲するものと考えられる。松川は『日本書紀』天武天皇元年（672）の筑紫大宰・栗隈王の発言「城を峻くし隍を深くして、海を臨みて守らするは」から、白村江の敗戦から約10年が経過してもなお、大野城や水城が対外防衛施設として強く意識され、筑紫大宰の下で維持管理されていたことを指摘する。第２部「大宰府と古代山城の年代論」でも指摘されるように、古代山城が複合的な機能を有していたことは確かだが、対外防衛機能（防御施設）を本質的機能から除外することはできない。第６章「大野城と古代日本の戦争」では、小嶋篤がこの対外防衛機能（防御施設）を支える兵器から、大野城の防衛設計を探った。小嶋は戦時下の大野城では大宰府保有兵器の運用が構想されていたと考える。政庁周辺官衙跡出土品を含む奈良時代以前の兵器備蓄事例を俯瞰すると、弓矢の量的確保とともに、古墳時代武装様式の踏襲が把握できる。この実態とともに、古代山城の造営期と編纂時期が重なる『日本書紀』記載の集団戦闘形態をふまえ、大野城眼下にある官道、とくに峠や渡河地点が開戦時における防衛設計上の要所であったと指摘する。第５章「大野城の土木技術」では、入佐友一郎が土木工学の視点から、防御施設の根幹をなす古代の技や工夫を検討した。入佐の計測によると大野城の城壁（土塁）角度は55～60°で、現代の安定基準の２倍にも迫る急角度に達する。この急角度の城壁を維持する盛土技法を、版築１層の厚さ・施工方法・盛土管理方法から検証する。本検証では、入佐が実施してきた復元整備の経験が如何なく反映されており、締固めの回数や水分量の管理の「感覚」という考古学研究の技術論ではたどり着きにくい見解を導き出す。本研究成果と発掘調査成果の相互検証は、古代の土木技術の解明に向けて、着実な歩みを進めることができるだろう。

４．大宰府の官衙と諸司

第４部では、西海道の中枢である大宰府政庁周辺の官衙を取り扱う。佐藤信は第１章「大宰府の機能と律令国家」において、大宰府史跡の調査・研究の歩みを振り返りながら、大宰府の特質と機能を俯瞰的に整理し、大宰府をめぐる遺跡群を総体として『大宰府史跡群』とらえることを提言する。本提言は、大宰府を基点に「古代国家における中央と地方との関係を立体的にとらえ直す」ことを視野に入れている。大宰府は地方最大の官衙として、文字通り中央と地方を繋ぐ役割を担った。その役割を物証する資料の一つが木簡であり、平城宮・京跡では大宰府作成の荷札が出土する。酒井芳司は第４章「大宰府史跡出土の付札木簡」で、不丁地区出土の付札を国毎に整理し、その書式や形態を検討した。本検討により「付札は郡が主体となって作成したものが多く、郡が税の納入に責任をもつ」実態が明らかとなった。また、郡名のみの表記は、大宰府の前身である筑紫大宰や筑紫総領が地方豪族を直接の支配下に置き、８世紀以降も郡の人事権を掌握していたことに関係するとの見通しを示した。大宰府運営の実務を担った官員については、森公章が第２章「大宰府の官衙」で整理した。養老令文に基づくと、大宰府の官制は中央の太政官組織のミニチュア版の様相を呈するが、防人司や主船という独自部署も存する。これらの部署を実質的に支えていたのは、使部と府書生であったことが木簡や太政官符から見え、筑前国を中心に管内諸豪族の出仕が伺える。

第３章「大宰府の諸司」では、松川博一が文献史料を軸に蔵司地区の遺構と機能について検討した。「蔵」という字は、本来「大蔵」や「正蔵」のような中央のクラに用いるべきものだが、大宰府のクラは地方にありながら、中央の大蔵に準じて「筑紫大蔵」と呼ばれる。松川はこの用例から、蔵司の名が筑紫大蔵に由来するとし、その成立が奈良時代以前に遡る可能性が高いと考えた。また、大宰府の蔵司が中央の大蔵省に相当する官司である点をふまえ、大蔵省の建物配置と蔵司地区の遺構配置を比較検討した。その結果、蔵司地区の遺構は蔵司の曹司庁と筑紫大蔵院と把握でき、西海道諸国の調庸物の勘会・出納・

保管にともなう政務や賜禄儀礼を担ったと想定した。加えて、大蔵省の官下には、典鋳司・掃部司・漆部司・縫部司・織部司があり、官工房の一部も職掌に入ることをふまえ、蔵司地区前面にある不丁地区についても、蔵司の管轄下にあると考えた。不丁地区は、第４章「大宰府史跡出土の付札木簡」でも紹介されるように、紫草の付札木簡が集中的に出土し、かつ漆工や冶金関連遺物も豊富に出土する。不丁地区の工房的性格については、第５章「前面官衙跡の調査研究成果」で小田和利も、陶硯（定形硯・転用硯）の出土量の比較検討から、不丁地区に工房的官司が存在したと指摘する。また、不丁地区の付札木簡と墨書土器「政所・□司」の存在をふまえ、事務的官司も同地区に併存したことも想定する。

蔵司地区の中枢とも言える丘陵平坦部の調査成果については、第６章「蔵司地区官衙跡の調査研究成果」で、下原幸裕が平成21年から平成30年までの成果を整理した。本整理に基づくと、丘陵上の蔵司地区は大きく二段階に別れ、掘立柱建物群が展開する段階（蔵司Ⅰ期・７世紀末～８世紀初頭を中心）と、礎石建物群が展開する段階（蔵司Ⅱ期・８世紀～ 10世紀）に区分できる。両段階とも西群と東群という２つの区画からなり、建物配置の概略が分かる蔵司Ⅱ期では、倉庫を主体に儀礼・作業空間を備えた東群と、それを統括する政務・儀礼空間を備える西群という機能の違いが想定されている。なお、蔵司地区の遺物には、大量の武器・武具片が含まれるという特徴がある。第７章「鉄から見た大宰府官衙」では、小嶋篤が蔵司地区出土鉄製品の遺存状態を整理し、保管状態のまま被熱したと判断した上で、被熱要因として「兵庫火災」が最も可能性が高いことを指摘した。蔵司丘陵上での兵庫については、前掲の第３章でも松川が触れており、難波・平安宮の大蔵省の側に兵庫が置かれることから、大宰府においても蔵司に隣接して兵庫があった可能性を指摘する。また、倉庫と兵庫の隣接には、警備上の利点と、倉庫群が立ち並ぶ威圧的効果があると想定する。第７章では鉄製品だけでなく、その前段階の鉄素材や冶金工房からも大宰府官衙を検討した。律令国家を支える物資（財源）は、中央集積と現地調達を基本路線に据えており、大宰府官衙の建設は遠方からの物資輸送に依存するのではなく、輸送コストが低く、管理が容易な現地調達にも比重が置かれていたと想定した。遠方輸送と現地調達で確保した鉄素材は、大宰府官衙建設期においては、大宰府政庁西隣の谷筋に展開する工房群で製品に加工する。生産された製品は鉄釘等の建築部材・調度品を主体とするが、『日本書紀』における筑紫大宰への武器素材輸送記事等から、武器・武具生産も担ったと想定した。

５．大宰府の客館と響銅

第５部では、大宰府の外交機能と都市整備の鍵を握る客館に焦点を当てる。小嶋篤は第１章「新羅王子がきた時代」で、大宰府で客館が整備された飛鳥・奈良時代の国際環境を日羅関係から整理した。大宰府都城整備の契機となった白村江の戦いの後、日本と新羅は668年の国交回復を経て、735年の新羅国号改称の告知にいたるまで良好な関係が保たれた。この間になされた新羅仏教界との交流は、華厳宗の発展を促し、聖武天皇が推進した鎮護国家思想へと繋がった。735年以後の日羅関係の軋轢は深刻で、738年・742年・743年と新羅使を大宰府で放還する強硬姿勢をとった。文字通り、大宰府が外交の最前線であった。このような日羅関係の冷え込みのなか、752年に総勢700名を超える新羅使が来日したのである。放還・入京のいずれの判断をするにせよ、外国使節団に対し、文明国としての対応が求められる。この「文明国としての対応」を象徴するのが、都市整備とも深く関わる客館の存在である。第２章「「西の都」大宰府と外交施設」では、井上信正が大宰府条坊内で発見された客館跡の構造や機能を検討した。井上は、大宰府と平城京が唐長安城に代表される東アジア都城制に基づく都市として整備されたと説く。東アジア都城は礼制機能を備える存在であり、生活の場とともに儀礼的な場としても機能した。つまり、「日本という国が大宰府という場所で外交を行うため、その舞台として礼制機能を備えた「都城」を設けた」と考えたのである。加えて、大宰府条坊内の客館は博多湾岸の筑紫館（後の鴻臚館）とともに機能し、その関係は難波館と京内客館との関係と類似すると捉えた。当然、客館内では来客をもてな

すための備えが求められる。条坊内の客館でも、政庁周辺と同様に新羅の佐波理・新羅土器、唐の白磁・青磁といった高級品がそろって出土した。第３章「輸入陶磁器と喫茶文化」では、井上が客館跡出土品の陶磁器組成を整理し、その中でも「喫茶の器」について紹介した。唐代に体系化された喫茶は、当時の最先端文化であり、国際交流の最前線にいち早くもたらされたと想定する。

752年の総勢700名超の新羅使節団は、来日時に大規模な交易も行っており、その売買記録は「買新羅物解」として伝わっている。本文書には正倉院御物としても現存する白銅（佐波理）の名が記されており、高級食器として東アジア諸国で流通する実態がうかがえる。第４章「大宰府出土の響銅」では、井上が客館跡出土佐波理を紹介しつつ、このような特殊品の検討が大宰府条坊内部の利用実態把握につながるとの見通しを示した。第５章「響銅でつながる大宰府と東アジア」では、佐波理とも呼ばれる響銅について、製作・分布・用途の項目に分けて検討した。本検討に基づくと、大宰府が整備されていく７世紀では、響銅の出土地は、唐の首都である西安近辺、副都の洛陽近辺、水運の要衝である揚州近辺などに集中する傾向にある。一方、日本では伝来初期の古墳時代（６－７世紀）には古墳出土品が目立つが、８世紀になると大宰府などの限られた政治的拠点に集中するようになる。この状況は同時代の唐と連動しており、響銅（佐波理）が大宰府の都市機能を検証する一つの素材になり得ることを示す。９世紀以降、響銅は政治的拠点に加えて、和歌山県の那智等の宗教的聖地でも用いられるようになる。川村は、その背景に響銅が「東アジアに共通する聖俗両用の宝器」であることを想定した。

岩屋城跡から眺めた大宰府政庁跡（写真右下）以南の景色

響銅は文字通り銅製品であるが、鋳造工程のみでは「打つとよく響く澄んだ音を出す」という性質は得られない。鋳造後に轆轤回転で器面を削り、板金を加熱して鎚で敲いて成形する等の加工が求められる。第６章「現代の彫金作家からみた極薄青銅器」では、赤沼潔が2013年から実施する鋳造実験の結果をまとめた。実施内容は、鋳型の種類、鋳造法案、合金熔解、金属加工である。本実験は、合金の比率を変更する等の細やかな工程を幾度も試みる。本文のとおり、ほぼすべてが失敗の履歴だが、この履歴

大野城跡から望む宝満山

こそが重要な研究成果であり、製作技術解明への道筋を着実にたどっている。

6．山岳信仰と宝満山

第６部では、大宰府の北東（鬼門）に位置する宝満山に着目する。日本列島は約70パーセントが山地で構成されており、信仰面でも大きな構成要素として存在する。第１章「山岳信仰の考古学」では、菅谷文則が、「山の遺物・遺跡」を研究対象として捉える上での理論的手続きと、資料解釈の妥当性判断について、自身の研究歴から提言を行った。とくに、「資料の絶対量のきわめて少ない山では、その全体像を取り違える可能性が高い」との指摘は重要で、山を研究対象とする際の総括的研究の必要性を説く。

第１章における菅谷の指摘を宝満山に当てはめると、宝満山における信仰の変遷は縁起等の文字史料に加えて、考古学調査による実証研究が進んでおり、総括的研究の水準は極めて高いと評価できる。それは、第２章「考古学からみた宝満山信仰のはじまり」で触れられるように、昭和35年（1960年）の段階から、総合調査を視野に「宝満山文化綜合調査会」が発足していることに由来する。第２章では、第１次調査から研究を担った小田富士雄が、山頂付近に位置する上宮祭祀遺跡の調査成果をまとめた。その成果に基づくと、宝満山信仰の草創期に属する資料は律令祭祀的性格を有し、遣唐使派遣などの国家的事業や大宰府管内の有事に対する国家祭祀的性格が付託されていたことが窺える。

その後の様相は、森弘子が第３章「宝満山の歴史と信仰」で通時的にまとめた。本章でも遣唐使と宝満山の関係が『叡山大師伝』等から述べられており、とくに国家祭祀的性格は入唐僧の一人でもある最澄の二大願が象徴的である。その一つ六所宝塔建立については、第５章「宝満山の最新発掘調査成果」で山村信榮がその候補地を紹介する。六所宝塔は、奈良時代の国分寺・国分尼寺の制に替わって、法華経の功徳で日本国の平和な治国を実現しようとするもので、宝満山には日本の西端に配する「安西塔」が建立されたと伝わる。この安西塔の基壇と見られるものが、太宰府市教育員会の発掘調査で下宮と中宮の中間の独立峰で発見された。また、これら大宰府・遣唐使・天台宗に加えて、古代の宝満山信仰を構成する要素には、八幡神も存在することを第４章「宝満山と古代大宰府」で酒井芳司が指摘する。八幡神は隼人征伐や東大寺大仏造営の援助を通じ、急激に国家との結びつき強めた。対外防衛の役割を担った大宰府でも、鎮護の神として期待され、宝満山と八幡神、母の神功皇后が結びつきを強めたことが窺える。

第６章「宝満二十五坊の姿」では、岡寺良が山中に残る坊跡群の平面図（平面構造）と『竈門山水帳』、『筑前國続風土記附録』、『宝満山絵図』の文字・絵画史料から、具体的な坊名称の特定を試みた。その結果、宝満山では座主や東院谷坊跡群が主要伽藍である講堂の置かれていた中宮跡よりも山頂側に位置し、「聖と俗の混在」が生じていることを指摘する。加えて、その背景に弘治・永禄年中の混乱を発端にする山上坊群の成立を想定しており、やはり総合的研究に基づく資料解釈が求められている。

7．大宰府管内の信仰

第７部では、大宰府管内唯一の「神郡」である筑前国宗形郡を取り上げ、とくに沖ノ島祭祀の実像に迫る。第１章「宗像・沖ノ島と胸肩君」では、小嶋篤が沖ノ島祭祀と胸肩君の関係を実証する考古資料を整理しつつ、豪族としての胸肩君の実態に迫った。沖ノ島祭祀での胸肩君の関与を実証する資料としては、宗像地域の上位階層墓からも出土する有孔器台須恵器（沖ノ島系祭祀遺物）がある。他の傍証としては、宗像地域における有孔円盤と剣形品の導入状況や、沖ノ島21号遺跡と勝浦峯ノ畑古墳で出土する同型鏡組成の一致、沖ノ島祭祀の盛行と津屋崎古墳群の造営期の重なりが挙げられる。また、九州北部の古墳築造技術や葬送儀礼を検討した結果、律令期の宗形郡の範囲へと繋がる分布域の形成を確認

した。本結果もふまえ、胸肩君は「九州北部の複数の港を押さえ、諸豪族と協力関係を構築することで、実質的に玄界灘航路で幅を利かせていた」と想定した。

第２章「宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果」では、小田富士雄が発掘調査成果を軸に祭祀の変遷過程を整理した。本論考には、発掘調査およびその後の調査研究を牽引してきた小田の集大成ともいうべき内容が整理されており、沖ノ島祭祀方式の二大画期が見出されている。小田はヤマト王権が主宰する国家型祭祀を「大王直祭型」と「委託祭祀型」に整理した上で、成立期の沖ノ島祭祀が前者から後者へと移行すると指摘する。その画期とも言えるのが沖ノ島21号遺跡であり、勝浦峯ノ畑古墳（津屋崎古墳群）との繋がりも同型鏡組成から窺える。第３章「宗像・沖ノ島祭祀の実像」では、笹生衛が第２章で整理された沖ノ島祭祀遺跡の変遷（岩上→岩陰→半岩陰・半露天→露天）に対し、古代の神の考え方（神観）と祭祀の構成（祭式）から祭祀の実像に迫った。その成果に基づくと、沖ノ島祭祀は「①奉献品・祭具を製作し神饌を調理する祭祀の準備」、「②奉献品と神饌を供え、神へと願意を伝えて拝礼する祭祀」、「③奉献品を神の近くへと収納・安置し、神饌を撤下する祭祀後の対応」という三段階を基本的な祭式としていたと把握できる。本成果は、沖ノ島祭祀遺跡に留まらず、これまで漠然と「祭祀」として認識されていた調査記録に対し、『祭式』を見据えた再検討を促すものと言えよう。その再検討の一つとも言えるのが、第４章「巨岩と社殿」に掲載した後野・山ノ神前遺跡群と金武城田遺跡の分析である。小嶋は遺構の時空間的分析と遺物の使用痕跡分析を統合することで、祭式を見据えた遺跡形成過程を研究した。その結果、「神の存在を象徴する巨岩・神の占有空間である本殿」を核とし、その前面に「祭祀執行の空間」、さらに「祭具収納施設（神庫・石敷状遺構・埋納土坑）」が接するという社の空間構成とともに、祭祀が行われた時間帯や所作の復元に関わる情報を抽出した。また、巨岩と社殿において類似した祭祀痕跡を見出し、両者の連続性に対する具体的論拠を提示した。

第５章「沖ノ島祭祀と遣唐使の航海」では、大高広和が祭祀の変遷要因を、大陸との対外交流・対外関係から検討した。大高は祭祀の内容、祭式にかかわる変化、三宮での祭祀開始の画期として７世紀に注目する。本章では遣唐使航路の北路から南路への変更に対し、７世紀半ば過ぎに朝鮮半島南岸辺りから東シナ海を横断する中間的航路（広義の南路）の利用が見出されている。この点を重視し、航路の歴史、祈りの歴史としての画期を、８世紀初めではなく、７世紀の半ば過ぎに求めた。

第６章「御長手神事と沖ノ島」では、岡崇がイコモスの「古代祭祀終焉後の信仰は断絶しているのではないか」という疑念に対し、文献史料と考古資料の双方から、祭祀継続の物証を提示した。具体的には、「宗像宮年中目録」（1375年頃）等に記される、沖ノ島（息御嶋・瀛）に参って竹を従えて行ったという御長手神事や、沖ノ島で新たに発見された中世遺構（土師器皿集積）等を挙げ、双方の有機的繋がりも視野に入れる。御長手神事の内容は文字史料にも遺されていることから、沖ノ島出土遺物の再整理とともに、今後の調査研究でさらなる進展が期待できる。

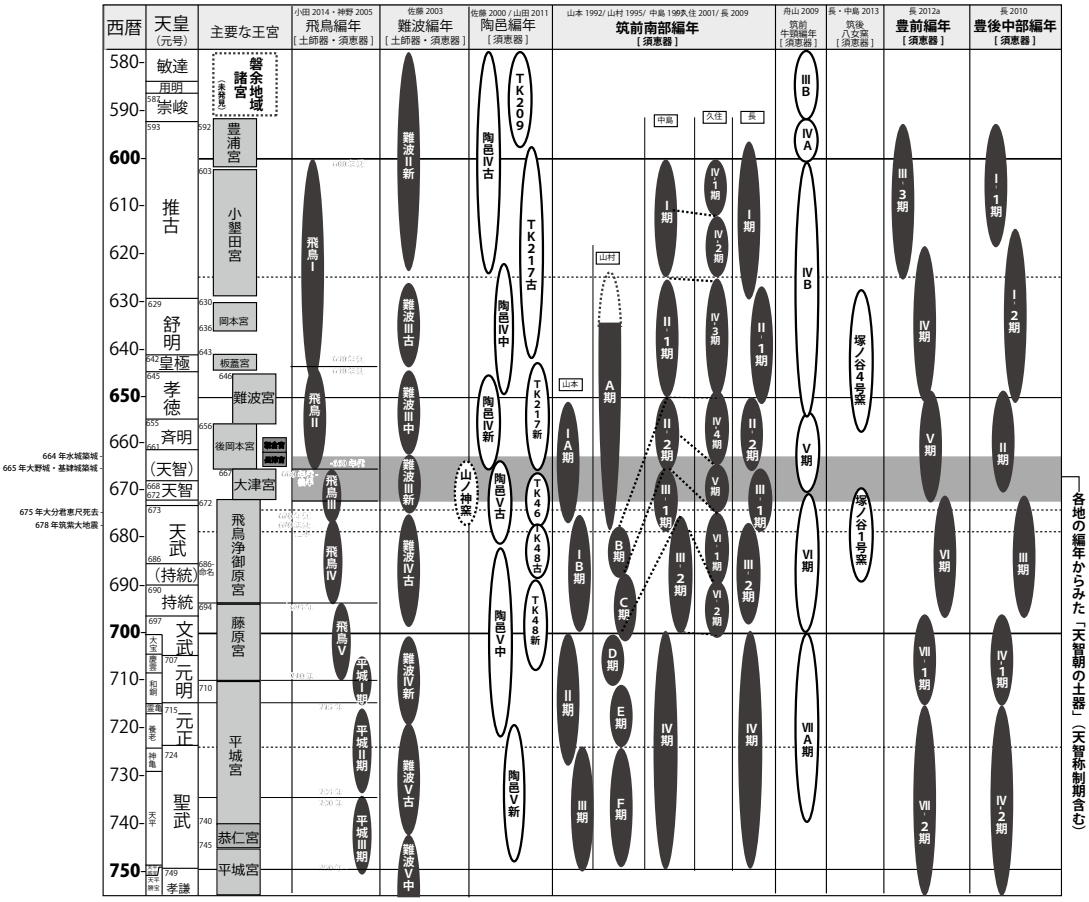
第７章「マツリの記録」では、今井涼子が大宰府学研究の一環として記録蓄積してきた「九州国立博物館デジタルアーカイブス」の概要を紹介した。本アーカイブスでは、当館隣接地の太宰府天満宮を筆頭に九州の無形民俗文化財のデジタルハイビジョン撮影・デジタル静止画像撮影を実施してきた。これらの動画は九州国立博物館の展示事業に利用する他、九州国立博物館ホームページ上でも公開し、ひろく視聴できる状態になっている。アーカイブスの記録を眺めた後に、第７部で主体的に取り上げた古代祭祀を振り返れば、遺跡に残る情報量の背後に、痕跡が残らない膨大な情報量が存在することを改めて認識できる。

おわりに

以上、各論考をテーマ毎に整理し、大宰府学研究の成果を概略的にまとめた。本整理が筆者自身の関心に偏ることは否定しないが、各論考を横断する共通見解と方法論的課題が見えてきた。共通見解につ

いては、調査研究のみならず、展示公開・教育普及活動でも大いに参考としたい。今後の大宰府学研究を進める上で、より重要なのは方法論的課題である。この方法論的課題を克服する過程を通じて、大宰府学研究はさらなる飛躍が期待できる。続く第２章「研究の展望」では、方法論的課題を足掛かりに大宰府学研究の展望をまとめたい。

「大宰府史跡群」という視覚



土器編年比較図（第 1 部第 1 章「西海道の土器編年」より引用）

第２章

研究の展望

楠井　隆志　　小嶋　篤

はじめに

本書を総括するにあたり、大宰府学研究の展望を「調査研究」と「博物館活動」に分けて明示する。

調査研究の展望では、第１章「研究の成果」で見出された方法論的課題を基に、今後の展望を記す。博物館活動の展望では、大宰府学研究の過程を再確認し、博物館としての課題を記す。

１．調査研究の展望

本書では大宰府学研究の展望を見通す上での重要な提言が、複数の論考で横断的になされている。本提言を端的に示すのは、第４部第１章「大宰府の機能と律令国家」で佐藤信が提唱した「大宰府史跡群」という視角である。本視角は、大宰府官衙・古代山城・寺院・交通路等の各遺跡を総体として大宰府史跡群と捉えようというものである。第１部第２章「西海道北部の土器生産」において、石木秀啓より牛頸窯跡群の操業が地域動態（軍事要塞化）と相関関係にあるとの仮説が提示されたが、本仮説も大宰府史跡群という視角の有効性を示す。また、第２部第３章「日韓古代山城の年代論」では、向井一雄が古代山城研究の次のフェーズとして、７世紀の地域支配体制の確立過程を課題に挙げており、やはり関連学問を含めた広域的視野が求められている。

大宰府史跡群という視角は、大宰府の景観復元と大きく重なる。第４部「大宰府の官衙と諸司」では大宰府官衙の配列や範囲、第５部「大宰府の客館と響銅」では古代都市の姿に迫ったが、宝満山等の山地も含めた大宰府の全体像を探る試みは、今後の大宰府学研究の学術的基盤となり得る。大宰府の全体像を明らかにするには、個別研究の統合、すなわち各研究間での批判検証を前提としており、自ずと方法論的練磨が図られるからである。

佐藤が明示したように、大宰府学研究には「遺跡だけでなく、史料・建造物・美術工芸などの多様な文化遺産からなる歴史資料を、総合的・学際的に調査・研究することが求められる」。その点において、第６部「山岳信仰と宝満山」は、森弘子の研究蓄積を軸に、通時的かつ総合的に研究成果が整理されており模範的内容となっている。また、第２部「筑紫の大城」では、赤司善彦がＧＩＳを利用した広域遺跡の把握方法を示した。第３部と第４部にかけては、小嶋篤が木炭・鉄生産と鉄器製作・使用・保管・再利用・廃棄の研究成果を統合し、大宰府の軍備の実態に迫った。第５部「大宰府の客館と響銅」では、井上信正により学際的視野から客館を中心とした古代都市の姿が論じられた。これらは一定の成果を挙げているが、歴史研究における個別研究の統合には、年代論という大きな壁が立ちはだかる。本書の冒頭、第１部・第２部に年代論を据えたのは、大宰府学研究の基盤を整えるとともに、基盤自体が抱える問題・脆弱性を直視するためであった。

第１部「大宰府の器と編年」は、文献史学・自然科学とならんで、古代史研究の一翼を担う考古学の年代論に取り組んだ。その中で年代論の精緻化・再検討に繋がる課題として、「遺跡性格差と土器編年」が取り上げられた。遺跡性格差を編年研究に組み込むことで、時間軸の整理がより精緻になることが期待できる。本課題については、第１部第１章「西海道と土器編年」で長直信が理論的枠組、第１部３章「西海道南部の土器生産」で松﨑大嗣が具体的事象を提示し、土器様式が著しく変遷する７－８世紀において、遺跡性格差と土器編年に有機的な関係があることは明らかとなった。ただし、遺跡性格差と土器編

年の関係を明らかにし、より普遍的な編年案を提示することは容易な作業ではない。本作業は個別分析による検証を積み上げつつ、同時に方法論的整備に向けた議論が求められる。遺跡性格差と土器編年の問題は、第２部「大宰府と古代山城の年代論」をはじめ、第３部～第７部の各論考の多くに波及する根幹的問題と言えよう。

この根幹的問題の解決を下支えするのは、発掘調査時の記録である。第２部第２章「大宰府造営の年代論」で杉原敏之が強調するように、層位的検出の記録が重要である。その調査記録を前提に、小田和利・下原幸裕が第４部第５・６章「前面官衙跡の調査研究成果」「蔵司地区官衙跡の調査研究成果」をまとめた。また、小田富士雄が記す第６部第２章「考古学からみた宝満山信仰の始まり」、第７部第２章「宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果」では、今日の研究基盤となった学術調査の成果がまとめられるとともに、最新研究からの再検討・再評価がなされている点で重要である。とくに沖ノ島祭祀遺跡の学術調査は、平成29年の世界文化遺産登録にいたる事実上の出発点となった。第７部第３章「宗像・沖ノ島祭祀の実像」では、上記の発掘調査成果を土台に「祭式」からの再検討がなされ、沖ノ島祭祀の具体的な姿が描写されるに至った。笹生衛が新たに示した「祭式」の視角は、これまで漠然と祭祀遺物・祭祀遺構と捉えられていた資料に対する再検討を促すとともに、遺跡調査手法のさらなる練磨を促進するものとなる。小嶋は第７部第４章「巨岩と社殿」で遺構の時空間的把握と遺物の使用痕跡分析を統合することで、祭祀の具体的所作に迫った。

上記の考古資料とともに、暦年代比定、さらには機能等を把握する上で重要となるのが、文献史学からの検討である。大宰府の文字史料では、政庁周辺官衙跡の不丁地区出土木簡が年代論および機能論で重要な役割を果たしている。第４部第４章「大宰府史跡出土の付札木簡」では、酒井芳司が大宰府の文書行政のあり方を「平城京－大宰府－国－郡」という機構の中で位置付けた。また、第４部第２・３章「大宰府の官衙」・「大宰府の諸司」では、森公章・松川博一によって、発掘調査で明らかになった各官衙に対し、文字史料から官衙の機能と諸司比定の提示がなされた。

以上、大宰府学研究の展望として、年代論も含めた大宰府史跡群の研究、大宰府の景観復元が重要と位置付けた。そのためには、重藤輝行が示した古墳時代も含めた「長期的視野での検討」、上田龍児が実践した「周辺集落の実態把握」、小嶋篤が指摘する「大宰府官衙・古代山城造営による環境改変」等も課題となってくる。これらを批判統合して、ようやく古代大宰府の一場面にたどり着くのである。大宰府学研究のさらなる飛躍のためには、松尾尚哉が第３部第７章「大野城と宇美の歴史的繋がり」で実践したような、「大宰府を基点に形成された歴史的環境」の追究も求められる。

２．博物館活動の展望

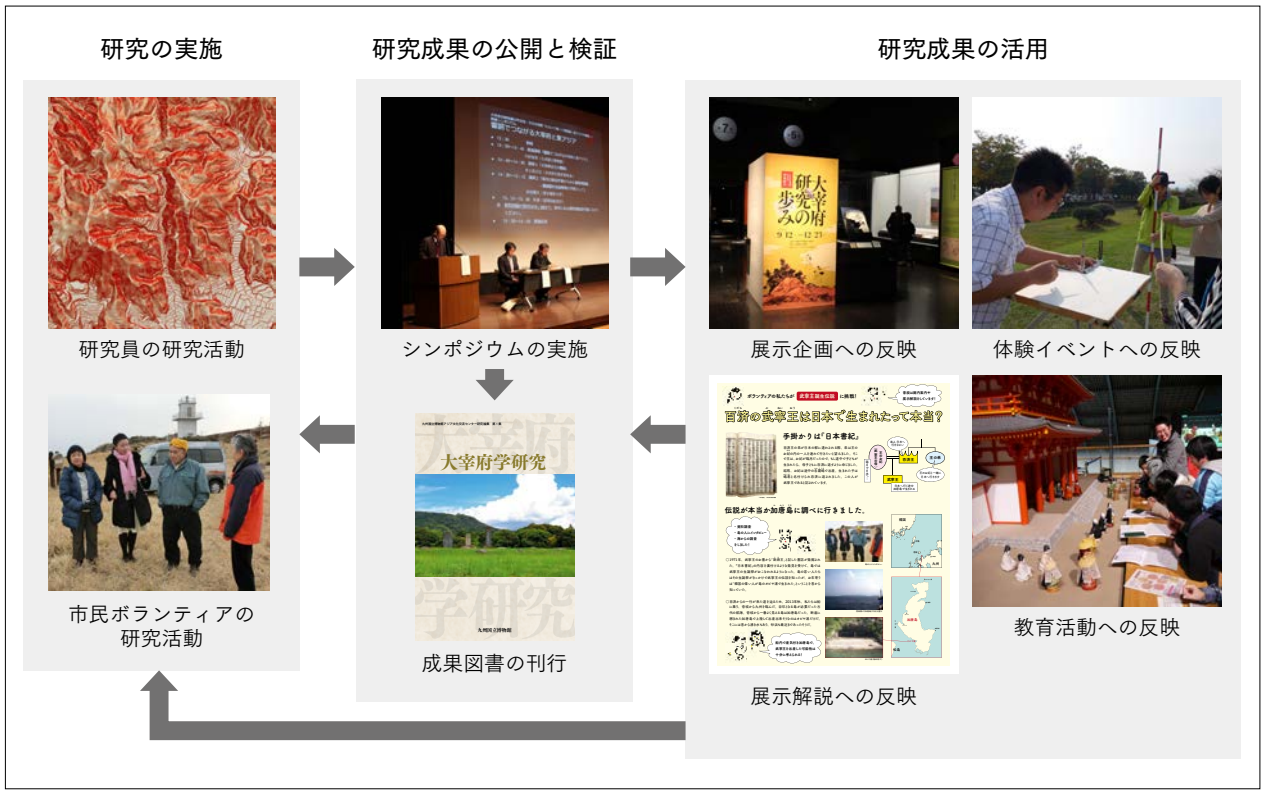
大宰府学研究の目的は、市民とともに「大宰府を基点に形成された歴史的環境」を研究し、その成果の公開・活用を考えることにある。今後の博物館活動の展望を記すにあたり、以下では、大宰府学研究の流れを再確認する。

まず、「研究の実施」は九州国立博物館の研究員を中心に、外部研究者および市民ボランティアが行う。研究員が研究テーマを設定する場合が多いのが実態だが、講演会・シンポジウムで会場から出た意見や、展示に対する質問、文化財指定等で市民の関心が高い内容を積極的に組み込んでいる。

「研究成果の公開と検証」は、学会発表や学術雑誌への投稿に加え、講演会やシンポジウムを実施している。これらの実施にあたっては、九州国立博物館が単独で行うのは稀で、研究テーマと深く関わる地元の関係機関と連携実施することで、成果の公開・検証に際しての多面的な相乗効果を図っている。また、今回はじめて『九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集』を編んだ。その理由は、論考の多くが当日配布資料に掲載されたものであり、主催者として成果の公開と検証が不十分であったとの反省からである。

研究成果の公開と検証を経て、「研究成果の活用」にいたる。九州国立博物館では、特別展に加えて、常設展示にあたる文化交流展で一年に約300回の展示替えを実施していることもあり、スピード感をもって最新の成果を展示企画に反映することができる。また、「学校よりも面白く、教科書よりもわかりやすい」をスローガンに、展示解説・体験イベント・教育活動等を市民ボランティア等の協力の下、実施している。

以上が大宰府学研究の一連の流れであるが、本事業は一方向的な流れで完結するものではない。「大宰府を基点に形成された歴史的環境」から「学んだものを活かし、新たな問いを生み出す」という過程こそに本質があるからである。つまり、大宰府学研究は循環型の事業と言えよう。現在、本事業は九州国立博物館の研究員を主体に進めているのが実情であるが、この循環の環をより広くする環境を整えることが、今後の博物館活動に求められる。



大宰府学研究の過程

おわりに

大宰府学研究の射程は広く深いが、その歩みは着実に進んでいる。本書は主に古代の大宰府に焦点を当てた内容だが、古代都市・大宰府の上には太宰府市・筑紫野市が、西海道の上には九州が重なっている。さらにその先には、アジアが広がっている。そのような重層的な繋がりについては、本書の成果も学術的基盤としながら、「平成」の次の時代に取り組んでいきたい。